
廃屋の死美人

多田 燈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廃屋の死美人

【Nコード】

N3626M

【作者名】

多田 燈

【あらすじ】

鼠や虫が這いずり回る廃屋の中で少年が目撃する狂気。

黒光りする六足のあいつが触角を動かしながら、かさかさと床や壁を縦横無尽に走り回っていたんだ。それだけじゃない。かたかたと音を立てていたのは鼠だろう。野郎も息を潜め何かを求めさまよっているようだった。俺の視界は前方の一点のみ微かに漏れる光を捉えていたが、それ以外は闇だ。だから見たわけじゃない。俺が潜んでいた隙間には俺と気味の悪い魑魅魍魎みたいな奴らしいなかったんだからな。流石に気配で分かる。今でもよくあの空間に耐えれたな、と我ながら驚かされる。気配以外にも建物それ自身が放つ、木が腐り、湿気が溢れ、食物の腐敗臭が混じり合わさった言いようもない悪臭。あれは情景を思い浮かべる度に鼻につく。あそこはそんな場所だった。

だが、自らの置かれたそんな最悪の環境すら頭の中から忘れつつまうほど、俺は前方から微かに漏れる光の向こうで繰り広げられる情景に意識を持っていかれていたんだ。あれは幼い時分の俺にとつてあまり衝撃的で、道徳も常識も欠片もそこには存在してなかった。

俺は光が漏れる隙間に片目を近づけた。真っ黒に汚れ、腐り、所々崩れた木の壁や床。それらが一点の蠟燭の明かりに照らされていた。小さな灯りはさながら結界であった。そこに闇は入り込めない。俺が隠れていた漆黒の闇と同等の闇を無力化する光はゆらゆらと橙色の光を放ちながら踊っていた。その光が一人の男を照らし出したんだ。男は裸だった。一糸纏わぬ裸体だった。顔は陰影ではつきりとは見えなかったが、眉間にしわを寄せ凹凸のはつきりしたその面が俺には鬼に見えた。男の体には汗が滲んでいて、ぜいぜいと肩で息をしながら一心不乱に体を動かしていた。腐った木の壁に映し出

された陰には男の体が大きく動いていた。まさに鬼気迫る、というやつだ。俺は息を呑んで男を見つめた。もちろん恐ろしかった。逃げ出してしまいたいほどにな。だが、さっきも言ったように好奇心が勝ったんだ。まだ気になることがあったからな。

俺が恐怖以上の興味をそそられたのは男が何をしているかということだった。男は不規則に休みなく体を揺らしていたが、般若の如き面に収められた眼球は、ぎょろりと一点を見つめていた。俺は体を震わせながら男の視線を追った。存在の半分を闇に溶かしたそれを視界に捉えたとき、俺の体を稲妻が駆け抜けた。訳がわからず、体の自由が利かず、意識も体を飛び出していた。訳がわからなかったのはそれが良く見知ったもの……人間の姿をしていたからだ。しかし、人間ではない。瞬間的に確信した。目は飛び出さんばかりに見開かれ、懇親の力をこめて食いしばった歯が釣りあがった唇の間からその姿を露にしている。顔中の皮膚という皮膚がしわを形成し、凹凸が光を浴びて細かな陰影を生み出していた。右腕は根元から床から一直線に聳え立ち、開かれた手のひらの先、五指に至るまで天を突き刺さんとしている。黒ずんだ肉体に居場所を見つけ、必死に蠢く蛆虫の群れ。その横にくつきりと刻まれた刃の痕と固まった血痕。足は折りたたまれた状態を縄で縛られ、男を迎え入れる体勢のまま固定されていた。

男は鬼気迫る表情で命なき女に躍りかかっていた。唾液が飛び散り死体を濡らしていく。迫る男の腰の動きが止まることはなく、首は不規則にあちらこちらへと飛び跳ねる。眼球もまた少しずつ正規の位置を脱して白目をむき出していた。男の意気が上がっていく。腰を動かす間隔が短くなってゆく。男の目は血走り、不規則に並んだ歯を食いしぱり、そして……声を上げた。栓が抜けたような声だった。男の体に張り付いていた気迫は風船のようにしぼんでいった。男はしばらく放心していて、自分のまぶたの裏を、今にも崩れそうな部屋を、自分と繋がった死体をじつくりと時間を掛けて眺めていた。男の呼吸が整うにつれて俺の鼓動も徐々に治まっていた。実

に感じた恐怖が峠を越えたと認識したからだだった。だが、それは子どもの浅はかな推量でしかなかった。

完全に平静を取り戻した男は死体を撫ではじめた。手づかいは先ほどまでの鬼神の如き荒々さが嘘のように優しいものだった。無表情のまま、頭・首・肩・腕、体の隅々まで細部に至るまで手を這わせていた。皮膚に寄生した蛆虫の群れを押し退けながら、男の手のひらが皮膚の上を行き来する。と、その手が鋭利な刃物で傷つけられたと思われる深く大きな傷口に触れた。男は傷口の大きさを確かめるかのように指を使って丁寧に傷口をなぞった。それまで無表情だった男の顔に笑みが浮かんだ。喜びのそれではなかった。子どもが悪戯の道具を見つけたときに浮かべるそれに近いものだった。突然、男は傷口に手を差し込んだ。一度の動作で手首までが死体の腹部に差し込まれた。男の腕が右へ左へと回転する。手首が傷の中へ消えていく。死体の腹部が腕の動きと共に起伏を繰り返す。それを目にしては男の笑みが悪魔的なものを帯びていく。子どもの俺の目には確かに悪魔に見えた。まさに悪魔の所業だった。男が傷から血に濡れた手を抜き、腹部から取り出した何かを玩ぶに至り、俺は振り返ることをなくその廃屋を飛び出した。物音など何も考えることはなかった。吐き気を催すほどの恐怖に駆られ、一目散に交番へ走った。

事件とは縁もゆかりもない平和な街は大騒ぎだ。俺の言葉に半信半疑だった警官たちも、死体を見るなり血相変えて働き始めざるを得なかった。騒ぎはあつという間に静かな街を包み込んだ。街にこれほどの人が住んでいたのかと再認識させられるほどの野次馬が寄って集った、らしい。マスコミに紛れて現場に入り込んだ奴もいたというのも聞いている。まだマスコミが現場を徘徊しても何も言われない時代だった。

ん、ああ聞いているといったのは俺が実際にその野次馬を見てい

ないからだ。そのとき俺は交番の一室で体操座りしながら歯をがちがちといわせながら震えと戦っていた。波のように吐き気が押し寄せてくるから、近くにお巡りさんが用意してくれたバケツを置いてな、いつ吐いても大丈夫なようにしていた。短く途切れ途切れにしか証言が出来ない俺に対して私服警官のおっさん方は優しくなだめるように話しかけてくれた。不満足ながら最低限の聴取が終わると俺は両親に支えられて家路についた。

平静を取り戻した後で聞いた捜査内容を聞いて俺は驚いた。なんと現場には俺が覗き見た女性の死体とは別に、女に覆いかぶさるように男の遺体が横たわっていたんだそうだ。後頭部から銃弾を打ち込まれ、眉間を貫通していた。もちろん繋がったままだ。情事の一部始終を眺めていた俺が疑問を持ったのと同じく、俺の証言を聞いていた警察でも頭を抱えていた。

俺が廃屋から飛び出すまでは確かに男は生きていた。脳内にこびりついた男の顔つきは男の遺体のそれと同じものだった。後日改めて屍となった男と引き合わされたが間違いない。と、なると俺が廃屋を出てから誰かが男を殺したことになる。警察はすぐさま当時廃屋に近づいた人物を捜し求めた。警察の努力の成果か、廃屋の方角より歩いてきた不審な人物の目撃情報が寄せられ、重要参考人として捜査線上に浮かんた。目撃情報を集めるべく警察は似顔絵を作成して俺の町はもちろんのこと、県一帯に似顔絵をばら撒いた。鳥打帽を目深に被り、ふちの円いサングラスという誰が見ても不審者とみるであろう風体は、人の目を集める代わりに人相がわかり難くするには最上の服装だった。似顔絵を見た俺たち一般市民に理解できたのは、サングラスから下にのびた鋭い顎と唇の横に申し訳程度に置かれた黒子だけだった。似顔絵としての目的が果たせていないことを言われなくとも警察の連中も分かっていただろう。寧ろ、こんな似顔絵をばら撒かなければならなかった警察の必死さと苦悩を今更ながら同情する。が、警察の活躍はここまで。新たな目撃情報が寄せられることはなく、現場に残されたものからも似顔絵の人物を

追跡することは出来なかった。警察の苦悩は治まることなく、努力も報われなかったわけだ。

町を襲った姿の見えない恐怖も、三ヶ月も経つと誰もが落ち着きを取り戻していた。スクープを狙う少数のマスコミの集団がまだ町を徘徊していたが、警察が新たな情報を得ないことからひとつ、またひとつと減っていき、一年も経つ頃には以前と変わらぬ生活に戻っていた。

俺自身興味関心に溢れた少年時代の日常に追われ、すっかり過去の恐怖を忘れてしまっていた。さらに親父の仕事の都合でそれまで俺が暮らしてきた町とは全く様相の異なる都会に引っ越してしまつたことから、過去を思い出すきっかけすら失ってしまった。

2

普通なら話はここで終わりそうなのだが、奇妙な俺の体験が一層奇奇怪怪な展開を見せるのはこれからだ。あれは事件から三年経ち、引っ越した新たな町にも順応し手来た頃だった。俺はあと半年で小学校という義務教育期間内最長の六年とおさらばしようとしていた。毎日友人とつるんでは草野球に明け暮れ、今に夢中で過去を顧みる余裕などなかった。

そう。その日も草野球に熱中し、夕陽を背に家路を歩いていた。一応は賑やかな都市だったから、野球が出来る広さの土地というものはおのずから限られるものだ。俺たちが普段使っていた広場は、家から駅を挿んだ丁度反対側。駅まで自転車で十五分、広場まで三十分といったところだ。子どもの生活圏としてはかなりの距離とみていいだろう。俺は野球を堪能した後、家路を自転車を押して歩いていた。広場から帰るとき自転車の後輪がパンクしていることに気づいた。友人たちは最初こそ気遣って一緒に歩いてくれたが、門限が怖いといって共に駅を見ることもなく帰ってしまった。まだまだ

地震・雷・火事・親父が当たり前の時代だった。白状といえば薄情な話だが、俺自身親父の逆鱗に触れるのはゴメン被りたかったので一概に仲間たちを攻める気にもならなかった。俺は仕方なく一人とぼとぼと我が家を目指した。

そろそろ駅にさしかかろうとした時だった、俺の視界が一人の男を捕えた。俺の進行方向とは逆に、俺の元へ向かってくる。瞬間見覚えのある顔だと確信していた。どこで見かけたかは思い出せないが、見た、という確信が脳を反射的に記憶の闇の中へ探查に向かわした。曖昧なものを見て見ぬ振りして放り出すのはどうにも気持ち悪い。俺は心臓以外の体の働き全て脳に回した。外から見れば歩みを止め、照りつける日差しの中を立ち止まったのだ。男はわき目も振らず陽炎をかき分け俺に迫ってくる。陽炎が生み出す空間の歪みが接近とともに解消され男の輪郭が鮮明になっていく。

浅黒い肌に太く濃い眉、鳥打帽の端からのびるもみあげ。そして血のように紅い唇の間からのぞく、黄色く汚れた鋭い犬歯。

駅前の雑踏の中にありながら男の足音までもが明確になる。息遣いが耳に届く。近づくにつれ道の真ん中で仁王立ちしていた俺の鼓動は、これでもかというほど速く脈打ち、心臓が破れそうだった。鼓動は男が横を通り過ぎていくときピークを迎え、距離を置くにつれ徐々に収まった。まるでドップラー効果だ。

俺は歯を噛み締め、意志を拒絶する首の筋肉を抑え込み、恐る恐る振り向いた。男は軽く背筋を丸め歩き去る。このとき俺の脳は記憶の底に沈んでいた男の記憶を探り当てていた。それは忌むべき記憶だった。咽返るような埃臭く汚れた空気の中で害虫と溝鼠の群れに囲まれ覗き見た、死姦に耽り、その果てに殺された男の記憶。三年前の事件の重要参考人として指名手配された男を探し出すために警察により作成された似顔絵。今すれ違った男はその似顔絵と瓜二つだった。

怯える自らを奮い立たせ進むべき方向を変える。一度、ごくろ、と唾を飲み込み俺は男のあとをつけていった。

男の歩みに迷いはなかった。振り返ることはおろか辺りを見回すことすらせず、頭を前方に固定し丸い背筋を揺らしながら一定の速度で歩いていく。そのおかげで俺の尾行が気づかれることはなかった。

景色は街から住宅街へ、さらに住宅すら疎らになり田んぼや畑の姿が見え隠れする。その頃には太陽は地平線に交わり、横から照りつける橙色の日が黒い影法師をあちこちに生み出していた。男は影のお供を連れなお歩き続ける。かれこれ一時間歩き詰めだ。しかもただ歩くのではない、距離を置き気づかれぬよう尾行し歩くのである。その精神的負担はいくら子どもが無尽蔵の持久力を持っているとしても疲れを感じる。全身を汗にまみれ、服が張り付く。その周りに疲労感がまとわりつく。流石に諦めの気持ちが始めていた。

しかし、そのような時遂に男が動いた。舗装された道を逸れ脇の草むらを進んでいくあたりは田んぼが広がり、視界に映る民家まではかなりの距離だった。茂る雑草を踏みしめ男は歩いていく。真っ直ぐ、真っ直ぐ歩いていく。俺は男の前方を眺めた。そこにはぼろぼろで今にも崩れ落ちそうな木造の小屋が建っていた。三年前の現場とよく似た小屋だった。男は小屋の前までたどり着くなり乱暴に扉を開き中に入っていた。俺は少々時間を空けてから小屋に近づいた。腰の高さほどあった茂みの中に身を隠した。粗末な小屋だけあり覗き穴はすぐに見つけることが出来た。

小屋の中には先ほどまで後をつけた男と、その足元に猿轡で口を塞がれ手足を背中側に縛られた女性が蠢いていた。泥や埃で汚れた床には粗末な蓑が敷かれ、周りには大小さまざまな木材・農具・工具・藁の束といったものが乱雑に置かれていた。女性の体は細く顔もやつれており、とても健康な状態とは思えなかった。女は目に涙を浮かべ、男の足元へ這っていった。きつとすがっているというのが正しかったのだらう。命を助けて欲しい、と懇願していたに違いない。男は女の態度を見て顔をボールのように蹴り飛ばした。血

が飛び散る。男はそれを見て汚れた歯をむき出しにして笑みを浮かべた。悪魔の笑顔だった。とても人間とそれではなかった。

三年前の記憶が蘇える。何もかもがそっくりだ。心臓の鼓動が速くなり、熱い血が体中をかけめぐる。体中が興奮していた。恐怖と好奇心が脳内で交錯する。俺は荒くなる息遣いを抑えつけ、目に全神経を集中し、穴の向こうの情景を除いた。

男は女性に躍りかかり服を脱がし始めた。女性は必死にもがいていたが、四肢を縛られた上大の男の力に押さえつけられたのでは何も出来ない。破れる布の音、ボタンの飛び散る音、男の荒い息遣い、女性の呻く声、そして自分の鼓動。様々な音が俺の中でこだました。音の洪水の果てに静寂が訪れたとき、一糸まとわぬ女性の肢体が床に横たえていた。男は女性の姿を醜き笑みを浮かべ舐めるように眺めた。そして懷から、ナイフを取り出した。

光もろくに当たらない薄暗い小屋の中にもかかわらずナイフは白く光っていた。男は逆手でナイフを握ると、一気に女性の腹部に突き立てた。女性の呻き声が小屋にこだまする。顔は苦痛に歪み。口にはめられた猿轡に歯がくい込む。しなやかな艶のある肢体が痙攣を起こしたかのように大きく震えた。俺は思わず目を逸らした。

恐る恐る目を覗き穴に戻すと、服を脱いだ男が女性を愛撫していた。縛られた女性の体に覆いかぶさるように、包み込むように男は乱暴に女性の体を征服していく。男が大きく体を動かすたびに男の体がナイフの柄に当たり、女性が大きな呻き声をあげる。呻き声上がるのを繰り返すにつれ、腹部の傷は開き、女性の体が、床が朱に染まる。女性の苦悶の表情は男の性欲を増進するだけだった。

女性の股を広げ男がそり立った男性器を押し付ける。もはや女性の抵抗はなかった。その目は虚ろだ。痛みで抵抗する力を失ってしまったのか。それとも必死の抵抗が男の暴力の前に無に帰したことで敵わないことを思い知らされたからなのか。男は虚空を見つめる女性の視線を真正面から受け止めると、にやり、と笑い腰を振り始めた。性器が擦れあう音が響く。女性が望んでいなくとも繰り返し広

げられる生殖活動の前に体は本能的に愛液を分泌しているらしい。俺は夕陽を背に狂気を目に浮かべた男と、今にも命が散り行かんとする女性の、不自然な性交渉を見守り続けた。

と、男の挙動に夢中になっていたがよく見ると、いつの間に縄が解けたのか、女性の右手が何かを求め床を張っていた。今にも果てそうな男は体を重ねているため女性の動作に気づいていない。女性の手があるものを掴んだ。たった今まで虚空を見つめていた瞳に殺意が宿った。ばきっ。

男の後頭部から血が流れ出した。女性が材木で男の頭部を殴りつけたのだ。男の体は痙攣させていたが、しばらくすると全く動かなくなった。凶器をつかんだ女性の腕も力なく床に横たえられていた。先ほどまで聞こえていた音は何一つ聞こえない。聞こえるのは日常で耳にする蝉の音だけ。俺はしばらくその場で呆然と立ち尽くしていたが、時間の経過が事の重大さ知らせてくれた。俺は三年前と同じく一目散にその場を後にし、交番を目指した。

3

「と、まあ、これが俺の体験した珍妙にして恐ろしい話だ。子どもの時分にあんなもんを見ちまうとは俺も運がない。今の立場が運のない俺の人生を象徴しているがな」

言葉を切ると男はグラスに注がれたウィスキーのロックをあおった。言葉こそ若く感じられるが、色黒い肌に刻まれた無数のしわ、痛んだ爪、ややこけた頬からは人生の山場を多く超えてきた空気が感じられる。年齢を読み取るのは難しいが、五十を超え六十を間近に控えているのではなからうか。初老という言葉が相応しい風貌だ。

「確かにそんなことを体験できるなんて天文学的な確率ですよ。幼

児教育としてはよくないんでしょうが、小さな確率に喜びを見出せるのであれば運が良かったといえるんじゃないですかね」

初老の男の横にまだ三十歳にも満たない青年が黒スーツを身に纏い、腰を下ろし、バーボンに沈んだ氷を眺めていた。頬を桜色に染め、酒に酔った目で見るグラスには一体何が浮かんでいるのか。

初老の男がこのバーに足を運んだのは偶然だった。久々の仕事の休み一日中家で寝て過ごす、という選択肢もあった。普段の彼であればそちらを選択していただろう。しかし、朝起きてカーテンから差し込む眩しい日光、垣間見える雲ひとつない青空を目にしたとき、男は外に出てみようと思った。別に遠出をしようと思ったわけではない。隣町の遊歩道のある公園で散歩をし、昼寝をむさぼった。空がオレンジ色に染まり始めた頃公園を発った。出迎える家族もない家にそのまま帰ることに気が引けて、人と光に導かれ駅前にやってきた。このバーを選んだのは喧し過ぎず冷た過ぎない自分にあつたムードを感じたからだだった。長年の一人暮らし、人とつるまない性格、人が恋しくとも多くの人を感じることに、触れ合うことに少々怖気づいたのだ。

数人がテーブルで各々が持ち寄った話を魚に酒を味わっている中、一人カウンター席で物思いにふけるように酒を嗜んでいたのが今話している青年だった。よく手入れされたスーツの上には歳は若くみえるが、それに相応しくない精悍な顔があった。男は青年に興味をもち話しかけた。最初こそ青年は話に相槌を打っただけだったが、徐々に彼から話をしてくれるようになった。人ごみは嫌だが人が恋しいというどっつつかずな男であつたが、人と話せることの喜びと、酒の力もあり、彼は久々に饒舌になって自分が体験した珍しい過去を話した。

「なんにせよフィクションでもノンフィクションでも十分楽しませていただきましたよ」

グラスに視線を向けたまま話す。初老の男は青年の横顔を見た。酔っているのは分かる。自身が語ったのも気持ちよく酔っていたと

ころを、偶々一人で飲んでいる仲間を見つけたからだ。だが、饒舌に語った実際の体験談を作り物、と一蹴された気分になり、小さな怒りがこみ上げた。

「悪いがさつき話したことは全て事実だ。子どもの頃の俺がこの目を通して脳に焼き付けた真実の物語だ」

語気が荒かった所為か青年は反射的に男を見た。表情も、声色も何一つ変化はしていなかったが、

「それはすみませんでした」

と、謝意を述べた。

このようなやり取りがあり、お互い最初のように気軽に話しかけられなかった。自分の過去を自慢するように語った男にも原因があるかもしれないが、相槌を打っていたにもかかわらず作り話と一蹴した青年にもまた非があるう。つまりどっちもどっちだ。二人の間にしばらく沈黙が流れた。

流れを変えたのは青年の一言だった。

「ところで先ほどの話でいくつか気になるところがあるんですがね」

突如沈黙が破られ男は少々驚いていた。沈黙に身を沈める原因となったセリフを吐いた青年の話題とは思えなかった。意表を突かれたが、先ほど話したことを事実として理解してくれたことに喜びを感じ、再び話せることに気を良くした男は素直に答えることにした。

「聞きたいこととはなんだい」

「二つ目の事件ですね。警察の捜査は一体どうなったんです。最初の事件は警察の動きを聞きましたが、二つ目は話してくれなかったの……」

「ああ、話していなかったか。二つ目の事件は、女性の死亡推定時刻が男のそれとほぼ同じだったことや、男の死因となった頭の傷は女性の遺体が握っていた長さ一メートルほどの木材と形が一致、木材の先に付着した血痕は男性の血液に間違いない、ということだ。

俺の証言が裏付けされた訳だ」

「目撃者がいても現場は念入りに調べられたんですね」

「ははは、あの頃は俺のいうことが信じられないのか、と子ども心に傷ついたものだが、今考えてみると子どものいうことだからな、信憑性に疑問を感じることは致し方あるまい」

初老の男は胸ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。ゆっくりと味わうように吸い込み、紫煙を吹き出す。バーの照明が煙に霞む。男はタバコを勧めたが青年は固辞した。

「あなたが尾行した男性は予想通り三年前の犯人だったんですか」

「らしい、としかいえない。男の経歴は警察によつて洗われた訳だが、暴力団と手を組み死姦愛好家たちの性欲を発散させる仕事に携わっていたことがわかった。関係した暴力団の一部構成員は逮捕されたようだが、三年前の事件は分からず仕舞いだ。元々三年前の事件には凶器の指紋などの有力な証拠が無かったから、警察は容疑者の自由に期待していたんだ。その容疑者が死んじまったんじゃあ警察もお手あげだ。確か迷宮入りしていた筈だ」

「そして三年後の事件は男と女が相打ち、と」

「そういうわけだ」

二人の間に再び沈黙が流れる。二人の会話が始まってから最も長い沈黙だった。男は質問をするだけして黙り込んでしまった青年を横目で見ながら、話の種を探しつつタバコを吹かした。青年は思案顔でロツクを呷り同じものを追加した。どちらも久々に訪れる沈黙を思い思いの方法で持つて楽しんでいた。

「どうしても合点のいかないところがあるんですが……」

再び沈黙を破ったのは青年の言葉だった。男はまだ気になるところがあるのか、とやや煙たがるような顔をしながら青年を見た。青年は真正面から男を見ていた。これまで青年は話していても正面を見ているか、やや男へ顔を傾ける程度だったので男は反射的に身を硬くした。

「なにがだい」

言葉も瞬間的に緊張していた。

「三年後の事件であなたが小屋を離れ、助けを呼びに行っている間に、小屋に何者かが侵入した形跡は無かったですか」

男は青年が何を意図しこのような質問をしたのか理解できなかった。ゆえに自分の知っていることを話した。

「警察はそのようなことをいつていなかったな。俺の証言の裏づけを取っていたくらいだから誰かが侵入したということはなかったと思うな」

それを聞いた青年はやや俯いて何か考えているようだった。

「そうなるも妙ですね」

「何が妙なんだい」

「女性に男は殺せませんよ」

男は絶句した。青年が言った言葉が理解できなかった。

「こ、殺せない訳はないだろう。実際に女性が凶器を持っていたんだ」

男の口から出てきた言葉は緊張したときのそれと同質のものだった。

「その凶器ですがね。女性は腹を刺されていたんでしょう。と、なると腰を捻った動きは出来ない。いくら力の強い女性でも腰の動きを制限された状態で男を殴り倒すのは困難でしょう」

「火事場のクソ力というものもある。人はいざというとき想像もできない力を使うものだ。それに、火事場のクソ力など無くても、女性が男性の頭を殴ったのは木材の先端でだ。腹部をやられて腰が回せなかったとはいえ、腕の力だけでも木材の先端は十分のスピードと破壊力を持っていると思うがな」

「腕の力など使えませんよ。そもそも女性は物を持って男を殴るにしても最も破壊力のある位置で殴ることが出来ない」

「なぜだ。なぜ腕の力が使えないと否定できる」

「簡単ですよ。あなたは女性が木材で男を殴ったとき、男は女性と体を折り重なるように密着させていたといいました。つまり男の頭

は女性の顔の前にあつたはずです。女性が伸ばした腕を振って、尚且つ木材の先端に血痕が残る結果など距離的にありえない。もしそんなことをしたとしても木材は空を切るだけです」

青年は一気に言った。眉間には皺が寄っていた。険しい顔で男を見ている。

「……」

「それに男の傷は後頭部にあつたのでしょうか。もし、あなたの記憶が間違っていて女性と男の体が密着しておらず、女性が腕を伸ばし木材で男を殴ったとしても、それは側頭部及び顔面に当たる確率が極めて高い。後頭部など殴ることなど出来はしない。後頭部を殴るなら男と密着した状態で腕を曲げ、木材の柄を使って殴ることになる。しかし、腰の動きを制限されているので、それによる撲殺の成功率は極めて低い」

男は言葉を発することが出来ない。

「つまり男を殺した犯人は女性ではない。更に何物かが侵入した形跡もない。犯人は一人しかいない。その犯人は男を殴り倒したのち女性の手に木材を握らせたのでしょうか。死後硬直が始まる前だったのかもしれないし、男を殴る力がないだけで瀕死の状態だったのかもしれない。犯人がどのような気持ちで男を殴り殺したかは分かりませんがね」

あなたは自分の証言が疑われた、といいましたね。女性が男を殴り力尽きたのであれば、女性の手にも血痕が付着するに違いない。柄に付着した男の血痕比較するだけなのだから、あなたが警察にした証言が疑われる必要はないでしょう。疑われたのはそれだけ証拠が少なかったからじゃないですか」

男がタバコを落とした。がたがた、と体を震わせている。顔は汗で濡れ、顔面は蒼白となり、青年と目を合わせることができない。タバコは拾われることなく床から煙を上げていた。

「ノンフィクションと言いつつ実は作り話かもしれませんね。もし真実だとしても、とっくの昔に時効を過ぎていますよ。……では、

さようなら」

そういつて青年は席を立った。男の横を通り過ぎ店の出入り口へ向かう。かつんかつん、と革靴が床を蹴る音が鼓膜に響いた。

「不動ちゃん、今日はもうお帰りかい」

マスターが青年の、不動の背中に話しかけた。

「また近いうちに着ますよ」

不動は振り向くことなく去っていった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3626m/>

廃屋の死美人

2010年10月8日14時27分発行